東洋医学漢文をどう学ぶか

日本内経医学会講師　岩井祐泉

一、東洋医学漢文とは

柳谷素霊は『鍼灸医学摘要』（一九五六年）第八篇「漢方概論」の中で『黄帝内経』（素問、霊枢）『難経』『傷寒論』『諸病源候論』『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『十四経発揮』『医心方』について解説している。さらに『鍼灸医学全書―経穴学』（一九四〇年）では『甲乙経』『明堂灸経』『銅人経』『医学入門』『類経』『鍼灸聚英』『鍼灸大成』などを引用している。

以上にあげた書物はいずれも漢代から隋、唐、宋、元、明におよぶ中国の医学古典籍である。『医心方』はわが国の平安時代のものであるが、内容はすべて唐以前の中国古典の引用を編纂したものである。その後書かれたどの鍼灸医学書を見ても、ほぼ同様な解説や引用が見られるであろう。

漢方医学の他分野から『脈経』『金匱要略』『神農本草経』が加えられたり、その後出版された『太素』、新発見の馬王堆医書などが加わっているかも知れないが、いずれも中国の古典であることに変わりはない。

鍼灸医学にたずさわる者、また関心を持つ者であればこうした古典を読もうとしても何ら不思議はない。いや、ごく当然のことと言えよう。

中国古典といえば漢文で書かれている。漢文なら高校の国語の時間にだれでも学んだはずではなかったか。ところが古典を読もうとして実際に中国の医学古典を開いてみると、どうも勝手が違う、というのが大方の実情であるようだ。

意外に思われるかもしれないが、事情は中国古典の本場である当の中国でも同様であるらしい。それは同じ日本語でも飛鳥時代の『古事記』や奈良時代の『万葉集』がすでに江戸時代には専門の医学者でなければ読めないものになっていたことと事情は同じである（明治の文豪の作品でさえ、現代の学生には注釈なしには読めないものとなっているらしいが）。

「子曰」（子、曰く）は現代中国語では「老師説」（先生が言う）となるなどはまだよい。同じ語が古今で意味の変化を生じるものなどは厄介である。「走」は「歩く」、「湯」は「スープ」という意味に変化してしまったのである。魯迅の小説『朝花夕拾』には少年時、父に読まされた書物の意味が一字も理解できず、暗記するのが苦痛であっ

たという回想がある。

その中国では現在、医学古典の学習法を「医古文」という必修学科として重要視している。医古文で学ばれる内容は文字学、音韻学、語法学、訓詁、校勘、修辞そして天文、暦法といった古代文化常識などである。中国伝統医学を専攻する学生は必ずこの医古文を履修して、医学古典を読むのに必要な知識を獲得することをまず要求されるのである。

ひるがえってわが国の現状はどうであろうか。大学医学部はおろか鍼灸専門学校にさえ東洋医学古典の学習法を正式科目として採用しているところはごくまれであろう。中国で医学古典を読むために医古文が学ばれるように、わが国の東洋医学、鍼灸の分野でも高校教育の漢文からさらに視野を拡げた「東洋医学漢文」の普及が望まれるゆえんである。

二、日本内経医学会の試み

日本内経医学会では一九九六年四月から東京都文京区の湯島聖堂で筆者を講師として「東洋医学漢文入門講座」を開講している。一回二時間、月に一回、八月と一月を休んで年に一〇回というペースで、昨年度からは二年目以上の受講者を中級、新年度入会者を初級としてクラスを分け、初級では版本・抄本学から校勘、訓詁などの初歩知識を学び、中級では語法、修辞と言った各論をそれぞれ一～二年かけて学ぶ。

わが国では学習体系の確立していない東洋医学漢文であるから、講師も受講者も双方が雲をつかむように手探りしながらの三年であった。中国の医古文教科書は何よりも頼りであるが、そこに日本人が学ぶための工夫も必要となった。

たとえば中国では時代とともにいくら語の意味や発音が変化しても、基本的な語法構造は変わらない。「読書」（書を読む）、「入門」（門に入る）のように現在では読が「看」、入が「進」と用いられる語が変わっても、「動詞＋賓語（目的語）」という語順そのものは変化しないのである。

ところが日本語では動詞が後に来るために、漢文の語法構造が実感としてなかなか体得できない人が多い。そこで初級クラスでは受講者に知っている熟語から「動詞＋賓語」（動賓式）のものをさがしてもらうという演習をやる。うまくすると「通天」（天に通ず）や「悪寒」（寒をにくむ）のように穴名や病名などの日常的になじみ深いものが出てきて納得の声があがり、理解も早いように思われる。漢文でおなじみの返り点を使ってしまうとこの構造感覚が身につかないので、テキストに用いる例文では初級クラスからすべて返り点を用いないようにしている。

しかし母国語の呪縛はそう簡単に解かれるものでなく、中級クラスの演習で『素問』の一篇を選んで語法分析をやってもらうと「君王衆庶、尽欲全形」のところで「全形」を「全き形」と「形容詞＋名詞」に読んでしまう人がいる。やれやれ、とため息が出てしまうがここで頑張って振り出しに戻り、陳舜臣『日本語と中国語』の「同文」の説

明をコピーして配る。

秦の始皇帝が戦国時代七国に分かれた中国を統一したとき、当時使われた漢字の字形が七国でばらばらであったのを秦で用いられていた字形をもとに統一し、他の諸国で用いられていた字形を廃止したことを「同文」というので、つまり「文（字）を同じくする」という「動詞＋賓語」構造なのである、という説明である。

それから『漢語大詞典』の「全」の項目をコピーして配り、これは日本語で解説する。この全一二巻の辞典は中国の最新の辞書で用例も豊富なのである。はたして「全」の字義は一三あるが、「完璧な玉」という名詞に始まり、「保全する」「したがう」「治癒する」の動詞と「まったく」の副詞がもっとも用例多く、「すべての」の形容詞は古い用例では「全秦」のように国名につくものしかなく、「全人類」は現代の用例である。

さらに熟語では「全身」があるが、これも「生命または名節を保全する」という「動詞＋賓語」が伝統的な意味で、「形容詞＋～」は現代の用例しかない。

ついでに『素問・霊枢総索引』（日本内経医学会）という本があるので、「全」の出てくる箇所二九例をコピーして配る。形容詞は「徳全不危」（徳全ければ危うからず）が一例、一二例が「治癒する」、残りはすべて「保全する」であった。

このように、いくら頭の中だけで考えていてもしょうがないので、使える資料を総動員して調査する、これが研究の第一歩なのである、ということを受講者に体得してもらう、というのが教育方針と言えるかもしれない。

従来の伝統的訓読法も語法分析の結果いくぶん修正しなければならなくなる。実際に中国音で音読もされた平安時代までの訓読は意味をつかむのが目的であったが、江戸時代の訓読は儒教経典の暗記法でもあり、極論すれば都合よく日本語になりさえすればよいという面もあった。

『史記』の「何辞為」、「何渡為」は「何ぞ辞することを為さん」、「何ぞ渡ることを為さん」と訓読されたが、「為す」を動詞に取ってしまうならば「辞」「渡」という賓語が前に来ることの説明ができない。実はこの「為」は疑問の語気助詞であり、「何ぞ辞さんや」、「何ぞ渡らんや」で可いのである。「何＋動詞＋為」で「どうして～できようか」という疑問句になっているわけである。

三、おわりに

筆者は内経医学会の東洋医学漢文の学び方を用いて、新医協でも「医古文研究会」の講義をし、また昨秋から日本医科大学付属病院東洋医学科で『格致余論』講読を始めた。そこでわかったのは現代中国語を知っていても古典研究の知識がなければ古典は読めないし、何十年日本式の漢文を読んできた人でも最新の研究資料や語法知識がなければ越えられない壁があるということである。

四年目の今年度からは「入門」の二字を

外して「東洋医学漢文講座」としてもよいかと思う。この小文を読まれて古典研究の必要性に賛同される方、臨床に生かせる古典学習をめざそうとする方、東洋医学漢文の確立のために広くお力添えをお願いしたい。

新年度は四月開講、募集開始は二月から。問い合わせ、申し込みは必ずハガキかファックスで「日本内経医学会事務局（宮川）」まで。

〒333-0802 埼玉県川口市戸塚東一―一―三二
宮川漢方堂内
ファックス（〇四八二）九五―三〇二九
（〒336-0005 埼玉県浦和市東仲町二四―九）

医道の日本社刊　池田政一

古典ハンドブックシリーズ

5巻セット割引価格8,000円+税 〒520円
B6判244～308頁

中国古典医学の源流を"初めて読む人のために"、楽しいイラストと平易な文章によって、わかりやすく、寝ころんで読めるようにしたのが、本シリーズである。

素問ハンドブック

定価（本体1,800円+税）〒310円

鍼灸の原典たる「内経素問」は膨大な内容を蔵しており難解な字句も多いが、本書はその真髄を簡潔に述べている。

霊枢ハンドブック

定価（本体1,800円+税）〒310円

「霊枢」91篇の原文の口語訳とその解説。東洋医学の生理・病理・解剖、診断を分かりやすく説明。

難経ハンドブック

定価（本体1,800円+税）〒310円

経絡治療を行う上で、素問、霊枢に次ぐ必読書である「難経」をわかりやすく解説。

傷寒論ハンドブック

定価（本体1,800円+税）〒310円

漢方を基礎から学ぶのに「傷寒論」は不可欠である。実用的、実践的な書である「傷寒論」をわかりやすくまとめた。

金匱要略ハンドブック

定価（本体1,796円+税）〒310円

「傷寒論」と対をなす「金匱要略」を初学者にもわかりやすく解説した。

東洋医学漢文をどう学ぶか・続

日本医科大学東洋医学科顧問・
日本内経医学会講師　岩井祐泉

一、医学史跡巡りと東洋医学漢文

前号（二月号）で紹介した日本内経医学会の湯島聖堂での講座で、いちど課外学習を行った。今回の写真はその時のスナップ（宮下功氏撮影）、写真1は湯島聖堂敷地内にある神農廟の主で、江戸時代には医学祖神の第一に崇敬された神農の寛永十四～十五年（一六三七～三八年）に製作された木像である。元禄五年（一六九〇年）に現在の場所に移されたが、寛政九年（一七九八年）から明治維新までは現在の台東区浅草橋にあった多紀氏の医学館にあり、江戸の医家たちの尊崇の対象となっていた。年に一度の神農祭には像の両側に神農の徳を称えた対聯が掛かるが、板に彫られた文は当然漢文である。

観天地類陰陽　万世被其化
嘗草木察酸苦　千秋仰其功

「天地を観、陰陽を類して　万世其の化を被り、草木を嘗め、酸苦を察して　千秋其の功を仰ぐ」と読まれる。

写真1　神農像

写真2は墨田区向島の常泉寺にある医聖・張仲景の碑の前で説明する筆者。筆者の頭の上が碑の題で大きな篆書体で八字「醫（医）聖漢張仲景先生之碑」と四行に彫られている。その下の碑の全面にわたって中国の清代に桑芸が著した『祠墓記』という中国河南省南陽にある張仲景の墓と祠の改修にまつわる神異談が雄渾な筆跡で彫ってある。全文が漢文で書かれていることはいうまでもなかろう。

このような江戸時代の医学史跡に足を止めてみると、なんと漢文の多いことだろう。

東洋医学が江戸時代に隆盛を極めていたのは、このような漢文を教養として読みこなし、また自らも書く能力を身に付けた人々が東洋医学の担い手であったからにほかならないといっても決して過言ではないであろう。

二、鍼灸古典の学び方

では現代の東洋医学にたずさわるものが、漢文で書かれた東洋医学の古典にどうやって取り組めばよいのだろうか。

江戸時代を代表する学者で、儒学はもちろん、医学・本草学ばかりか地理学・歴史学などの広い分野にわたる学識を身につけていた貝原益軒（一六三〇～一七一四）の名著『養生訓』（これは文庫も出ているのでぜひ読まれたい）には「医書を読まずして、上手はあるまじきなり」（岩波文庫から引用）という。さらに、

「およそ医となる者は、まず儒書を読み、文義に通ずべし。文義通ぜざれば医書を読む力なくして、医学なりがたし。…（中略）…諸芸を学ぶに、皆文学を本とすべし。文学なければ、技熟しても理に暗く、術低し。ひがごと多けれど、無学にしてはわが誤りを知らず。医を学ぶに殊に文学を基とすべし。文学なければ、医書を読みがたし。」

という。ここで「文」というのは現代語の「文字」のことで、文義は字義、文学は言語学のことである。儒書というのはいわゆる四書五経などの儒学の古典のことで、むかしの中国では儒学の知識程度を試験する「科挙」によって、成績次第では農民の子でも宰相になれたので、儒学の古典について言語学的研究がもっとも進んでいたのである。

写真2　張仲景の碑を説明する筆者

「文学ありて、医学に詳しく、医術に心を深く用い、多く病に慣れて、その変を知れるは良医なり。医となりて、医学を好まず、医道に志なく、また医書を多く読まず、多く読んでも精思の工夫なくして、理に通ぜず、あるいは医書を読んでも旧説になずみて時の変を知らざるは、賤工なり。」（以上、漢字かな遣いを分かりやすく変えた）

このように古典医書を読む必要を力説し、そして『黄帝内経』や『本草経』をはじめ、三十五部の医書を「これ皆医生の読むべき書なり」としているが、現代では四書五経

などの儒学古典を読破してから医書に取りかかるなどの悠長はいっておられまい。そこで、儒学古典の二千年にわたる研究の歴史の成果として確立した現代言語学の力を借りることにしたい。

中国文化叢書①『言語』牛島徳次他編（大修館）

『中国古典の学び方』牛島徳次（同）

『図説　漢字の歴史』阿辻哲次（同）

『漢文語法ハンドブック』江連　隆（同）

それから、辞書である。

『大漢和辞典』諸橋轍次　一四巻五万字（同）

『大漢語林』鎌田　正　一万四千字（同）

文字学や語法学の基礎知識を得て、辞書をそろえる。これで一応勉強の準備は出来た。それでは何を読もうか。

筆者は読者諸氏が独学で読んで、それほどの困難を覚える事なく読め、また実際にすぐに臨床的に応用できるものとして、明堂文献をおすすめしたい。『黄帝鍼灸甲乙経』（『甲乙』）は『素問』と『霊枢』からの引用がその大部分を占めているが、それ以外に『明堂』あるいは『明堂経』といわれる経穴文献が引用されている。これは現在では失われた古典であり、『素問』と『霊枢』を類編、注釈して例の『太素』を著した唐の楊上善という人が作った『黄帝内経明堂』の写本断片がわが国に伝わっている。この『黄帝内経明堂』はどうやら失われた『明堂』の伝本の一つであるらしい。ほかにも平安時代の『医心方』の中にも、唐の『千金要方』の中にもこの『明堂』からの引用と思われる記述があり、これら、失われた『明堂』をもととして経穴の部位、主治病症などを記したものを総称して明堂文献という。

「神庭在髪際、直鼻。督脈、足太陽、陽明之会。禁不可刺、灸三壮。」（『甲乙』三巻一篇）

これは「神庭は髪際に在り、鼻に直る。督脈、足太陽、陽明の会。禁じて刺すべからず、灸すること三壮」と読む。

「神庭主風眩、善嘔、煩満。」（『千金方』三十巻一篇）

これは「神庭は風眩、善し嘔し、煩満するを主む（主は治に同じ）」と読む。「風眩」は宋の王惟一が著した『銅人腧穴鍼灸図経』（『銅人』）では「頭風、目眩」となっている。この『銅人』は『甲乙』などより成立の新しい明堂文献であり、興味深い付記が多い。

（額会の項に）「若八歳已下、即不得鍼。蓋縁額門未合。刺之、不幸令人夭。」（『銅人』三巻）

これは「若し八歳已下なるときは、即ち鍼することを得ず。蓋し額門のいまだ合わざる縁る。これを刺せば、不幸にも人をして夭せしむ」と読む。

三、臨床記録を漢文で書く

明堂文献がある程度読めるようになってくると、身体の部位の表現と病症の表現が分かってくる。そこで臨床記録の中にそのまま応用して、その部分だけ漢文で書いてみるとよい。

腕が上がらない　臂不挙
首が回らない　不得回顧（不得は不可でもよい）
上を向けない　不可仰
下を向けない　不可俯（俯は俛でもよい）
よく忘れる　健忘（健は「よく」）
頭が痛く耐え難い　頭痛不可忍
熱が出てカッカとする　身熱如火
あくびがよくでる　善欠（欠はあくび）
臍の周りを触れると痛い　繞臍切痛（切は触れる）
食欲がない　不嗜食
よく眠れない　不得安臥（臥は寝でもよい）
こどもができない　婦人絶嗣（嗣は子でもよい）

このように臨床記録を漢文で書いていると、思わぬ臨床経験につながることがある。筆者のところに糖尿病（消渇）で、右眼球が外転しない（右眼不得右転）ために複視が出て、ものが二重に離れて見えてしまい（視一物以為両）、めまいがする（目眩）という男性が来た。

主訴の複視、目眩のほかには、後頭部から背部にかけて手術までしたニキビの痕があり（脳疽、背瘡）、左の耳鳴り（左耳中鳴）、両下腿のむくみ（両脛浮腫）がある。脈は尺滑、右寸動。

現代医学では糖尿病による神経系の影響は考えられ、外転神経マヒによる複視、目眩は糖尿病の影響といえるが、ほかの病症はどうだろうか。

『諸病源候論』には「渇数飲、其人必眩（渇して数飲めば、其の人必ず眩す）」とあり、また『聖済総録』には消渇の項に「能食者、必発脳疽・背瘡（能く食う者は必ず脳疽・背瘡を発す）」とある。これら東洋医学の文献では目眩、脳疽、背瘡はいずれも消渇の病症としてとらえられるのである。脈の尺滑は消渇、右寸動と目眩は神茫であるから臨床記録に「消渇神茫」と書く。

来院三回で右眼球は少し外転する（右眼稍右転）。十回で複視の物が離れず重なるようになった（雖視一物以為両、両者不離）。十一回で複視のどちらが本物かわかる（雖視一物以為両、知其真仮）。十二回目の来院の後、数日して複視はなくなった（複視止）。

適当な漢語のない、日本近代の発明品などには漢語を作ってみるのも面白い。例えば温灸にいろいろあるが、従来の艾炷灸や中国の艾条灸（棒灸）にならって、カマヤミニなど艾を紙筒につめて小丸とし、皮膚を焼かない工夫をした灸は「艾丸灸」、またテルミーなど柄付きの小さい鏝の上に細い棒状艾を近づける灸は「艾熨灸」という漢名はどうだろうか。

日本内経医学会の東洋医学漢文講座の新年度は四月開講、募集開始は二月からで問い合わせ、申し込みは必ずはがきかファックスで「日本内経医学会事務局（宮川）」まで。

（〒333-0802　埼玉県川口市戸塚東一―一―三二
宮川漢方堂内）

東洋医学漢文のすすめ

日本医科大学東洋医学科顧問
日本内経医学会講師
岩井祐泉

一、何を学ぶか

今回から、中国で行われている医学古典の学習法である「医古文」という学科にふくまれている諸分野、すなわち文字学・修辞学・版本抄本学・校勘訓詁などの中から少しずつ、基礎的な説明を試みたい。

日本内経医学会の「東洋医学漢文講座」の初級クラスではおよそ一年間をかけて、ほぼこのような内容が学ばれる。ただし中国の医古文と異なるのは、東洋医学漢文講座では医学古典の文章が現代漢語発音で音読されるのではなく、伝統的に訓読されている点である。現代漢語発音が鍼灸専門学校卒業レベルの常識となるほど普及しない限り、伝統的な訓読法も医学古典の理解を助ける有効な手段であり続けるであろう。

もちろん、医学古典の解釈においてはあくまでも漢語の語法・修辞などを優先するのが当然であり、伝統的訓読法もいくぶん修正されなければならないことは本誌平成十一年二月号でもふれた通りである。

二、文字学

文字学をやさしく言うならば、漢字の知識体系というところであろうか。そもそも漢字の歴史は紀元前千三百年ころの殷代遺跡から出土した有名な甲骨文（亀甲・獣骨などに刻まれた占いの文）までさかのぼり、少数ではあるが石刻文・金文（青銅器の銘）などの資料も一緒に発見されている。

そのように古い歴史をもつ漢字で書かれた早期の古典籍の重要なものに『詩経』『書経』などがあるが、すでに孔子（前五五一～前四七九）の時代にこれらの書物に用いられた字句が難解で、解釈について学者たちが論じあったことが孔子学派の言行記録である『論語』などによって知られる。

漢字は長期にわたって用いられているうちに原義から派生義を生じて同じ字がいくつもの意味を持ち、また広い国土の山河によって隔てられた各地方の方言などによって、同じ意味で別々の字が用いられることもしばしばであった。そこで学問研究が盛んになった漢代（前二〇六～二二〇）には難解な字を解釈するための文字の学が興り『爾雅』『説文解字』『方言』などの最古の字書が作られた。

早期の医学古典である「素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』などはあきらかにこの時代にさかのぼる文献をふくむものであるから、その字句の解釈にはこれらの字書が参

考になる場合がある。

九州、九竅、五臓、十二節、皆通于天氣。（『素問』生気通天論篇）

「皆、天気に通ず」の「皆」が「九州、九竅、五臓、十二節」を指すのはもちろんであるが、身体の部位を示すと思われる「九竅、五臓、十二節」に地理的概念と思われる「九州」が混ざっているのはなぜだろうか。じつは古代の字書である『爾雅』には馬の種類を列挙した文中に「白州」があり、注に「州は竅なり」とする。これによると「九州」とはすなわち「九竅」のことにほかならず、「九竅」の二字は後人が「九州」の説明に加えた注が本文に紛れ込んでしまったものかもしれないと考えられるのである。

以知為数、以痛為輸。（『霊枢』経筋）

「知を以て数と為し、痛むを以て輸と為す」の「知」はあまりにも当たり前に「知る」と読んでしまいたくなる。しかし漢代の方言の字書である『方言』に「南楚（長江南岸地方）に病の癒える者を或いはこれを問といい、或いはこれを知という」とある。つまり「知」は「治」であり、「治するまでを回数とする」と解釈するのがどうやら正しいようである。

このように「州」が「竅」だったり、また「知」が「治」だったりというような、知っている字の知らない意味を学んで医学古典の解釈に役立てるのも文字学の重要な成果であるといってもよい。

三、語法学

どの言語もそれぞれ一定の規則によって組織され、運用されており、語法（文法）というものはその規則にほかならない。昨年話題になった大野晋著『日本語練習帳』（岩波新書）では英語やフランス語などヨーロッパ諸国の文法だけを中心にして「日本語は文法的言語ではない」と考えては日本語の特徴はわからないとし、「は」「が」のはたらき、意味の上での文末の役割など日本語独自の基本構造がきわめてわかりやすく説明されている。これはどの言語にもそれぞれ一定の規則があるという、当たり前の事実がなかなか容易に理解されないゆえに生まれた成功例といえよう。

漢語の特徴はヨーロッパ諸言語のような動詞の活用（イズ、ワズ、ビーイング）がなく、アメリカ、アメリカナイズ、アメリカンのような名詞、動詞、形容詞を区別する形の変化もなく、また日本語の「は」や「が」のように便利な助詞もほとんどない、単純さにあるといってよいだろう。

こういう言語では詞序（語順）というものが大事になってくる。「黄帝問」（黄帝問う）のように「名詞＋動詞」が来れば普通はその名詞が主語である。「岐伯答曰」（岐伯答えて曰く）も同じである。

ところが、名詞＋動詞が必ずしも英語のS＋Vのようにならない場合に気をつけな

ければならない。例えば漢語から入った日本語で「疑問が氷釈する」の「氷釈」、また「〇〇先生に師事した」の「師事」がある。

氷も師も名詞であり、また釈（とける）も事（つかえる）も動詞であるが、いずれもS＋Vではない。「氷のように釈ける」、「師として事える」と読むので、これらの名詞は動詞を修飾している「状語」と呼ばれるものなのである。状語＋動詞の例は医学古典にもしばしば見られる。

或痺不仁腫痛、当是之時、可湯熨、及火灸、刺而去之。（『素問』玉機真蔵論篇）

有名な「風者、百病之長也（風は百病の長なり）」に続く部分にあり、風邪によって「或いは痺、不仁、腫痛す」という症状が出てくる。「是の時に当たって」、「湯をもって熨し、及び火をもって灸し、刺してこれを去るべし」と治療法があげられる。「湯」、「火」はあとに続く動詞の「工具・方式」を示す状語、熨は温湿布である（火鏝の意味ではウツとよむ）。「刺」は鍼治療だけでなく、医療行為一般に対して用いられる。『霊枢』寿夭剛柔に「刺布衣者以火焠、刺大人者以薬熨之（布衣を刺す者は火を以て焠き、大人を刺す者は薬を以て熨す）」とあるのを参考としたい。「布衣」は庶民、「大人」は貴族である。生活習慣の相違による体質の剛健と虚弱によって治療を分けており、例文の「湯熨・火灸」もこれに呼応しているようだ。

名詞が動詞の後に来るときは、例えば「肝臓血（肝は血を蔵す）」の「血」は「賓語」と呼ばれ、動詞＋賓語の関係は英語のV＋Oに相当する。「妊子（子を妊む）」、「聞其意（其の意を聞く）」などはいずれもこのような動詞＋賓語の組合せである。

ところが動詞＋名詞だからといってすべて動詞＋賓語であるとは限らないのがやはり漢語の特徴の一つである。これも日本語にもなっている「昇龍」や「走狗」などがそれに当たる。「昇（のぼる）」も「走（はしる）」も動詞であり、「龍」も「狗」もれっきとした名詞であるが、普通は「龍を昇らせる」や「狗を走らせる」とはならないから、これは動詞＋賓語ではない。じつはこれらの「昇る龍」や「走る狗」の名詞の前の動詞はあとの名詞を修飾する「定語」と呼ばれるものなのである。

中古之時、有至人者。（『素問』上古天真論篇）

この「至人」の「至（いたる）」は動詞であるがあとの名詞「人」を修飾して「至った人」の意味となっている。「中古の時、至人なる者有り」。

さらにれっきとした動詞＋賓語の構文に違いはない「開花」や「落雷」などをどう考えたらよいのだろうか。動詞＋賓語であればあとに「する」という日本語をつけて意味が通じることが多い。「昇龍する」や「走狗する」は成立しがたいが、「開花する」、「落雷する」には問題がない。

だが「開花」は花が開き、「落雷」は雷が落ちるのようにこれらの賓語は前の動詞の意味的な主語となっている。動詞＋賓語であるが決してV＋Oではない。実はこれは「施事賓語」と呼ばれるもので自然界の活動の当事者などきわめて特殊な場合に限って用いられる。

しかしそのきわめて特殊な施事賓語が医書ではよく見られる表現である、といったら驚かれようか。それは「発汗」、「発狂」、「出血」、「失神」などの一連の身体現象についての表現にほかならない。

気象・生物現象など、天地の現象を表す言語表現に用いられる施事賓語が身体現象の表現にも見られるということは実に興味深い。

天円地方、人頭円、足方以応之。天有日月、人有両目。地有九州、人有九竅。天有風雨、人有喜怒。天有雷電、人有音声。天有四時、人有四肢。天有五音、人有五蔵。天有六律、人有六府。天有冬夏、人有寒熱。天有十日、人有十指。辰有十二、人有足有十指、茎垂以応之。女子不足二節、以抱人形。

（『霊枢』邪客）

天は日月運行の軌道の円形をし、地は東西南北の方形をしているという世界観に人体の頭部は丸く、足部は長方形であるという事実は合致しており、以下、天地の万象を身体に照応させる、これが「天人照応思想」である。辰（十二支）に足の十指と陰茎・陰嚢を合計して照応するのは微笑ましくさえある。しかし東洋医学のこうした照応思想はもしかしたら、天地・身体をどこかで同一視する施事賓語のような言語表現に根ざしたものではないだろうか。たかが語法というなかれ、ある民族の言語の運用規則はその民族の思考形式にまで影響を与えるのである。

（〒336-0005　埼玉県浦和市東仲町二四－九）

医道の日本社 刊

鍼灸真髄

澤田流聞書

代田文誌 著
B6判452頁
定価（本体2,100円＋税）・〒340円

鍼灸の名人といわれた澤田健に師事した代田文誌が、その日常治療の間に見聞したものを筆録。この書に記されている説は大方、鍼灸古典の説に基づくものであるが、同時に著者の独創的見解も多い。その思考や表現はきわめて素朴で簡単で、治療の実際に役立つ、臨床的真理の宝庫。

東洋医学漢文のすすめ・続

日本医科大学東洋医学科顧問
日本内経医学会講師
岩井祐泉

四、修辞学

修辞というのは「言辞を修飾する」という意味で、文章の伝達をより効果的にするためのさまざまな手法のことである。

修辞の規則や方法についての語言学的研究分野を修辞学という。現代の修辞学では修辞を消極修辞と積極修辞に分けている。消極修辞とは文章の明確な伝達を目的として的確な文字を選び、また正しい語法にのっとって字句を調整するもので、積極修辞は文字の本来の用法や意味を逸脱したり、また語法的な規則から見れば例外であるような用法をどしどし取り入れることも認めるものである。芭蕉の次の有名な二句を比べてみよう。

荒海や佐渡に横たう天の川

閑さや岩にしみ入る蝉の声

佐渡が島の夜空に天の川が「横たう」のはこの動詞の通常の用法であり、この句は消極修辞を用いているといえる。一方の蝉の声が岩に「しみ入る」というのは明らかに一句の印象を強める技巧であり、本来の用法を逸脱した積極修辞である。芭蕉の句にはさらに語順を倒錯させる例もある。

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

これは正しい語法にのっとれば「鐘撞いて花の香消える」とでもしなければならないところであろう。（芥川龍之介『芭蕉雑記』参考）

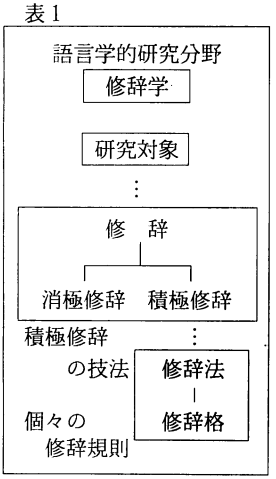
このような積極修辞に属する技法一般を修辞法といい、「比喩」や「引用」など個々の規則を修辞格という。整理してみよう（表1）。

東洋医学古典を読む上で注意を要するいくつかの修辞格を紹介しよう。

(一) 詞義の弁別のために－借代

文字の本来の意味を逸脱して用いられる修辞格の知識がないと、辞書に書かれた意味に固執してしまい、その結果いわゆる

表1



「望文生義（文を望んで義を生じる）」、すなわち字面からのこじつけというとんでもない誤りをおかして、正しい詞義の弁別ができなくなってしまう。

刺布衣者、深以留之。
（布衣を刺す者は、深く以て之を留む。）
『霊枢』根結）

縦綺羅満目、勿左右顧眄。
（たとい綺羅目に満つるとも、左右を顧眄する－目を見回す－ことなかれ。）
『千金方』大医精誠）

「布衣」とは麻布の衣、ひいてはそれを着て生活している肉体労働者である。「綺羅」とは絹の美服、ひいてはそれで着飾っている上流の婦女子を意味し、往診先の病家では病人の苦痛を第一に思い、精神を集中しなければならないとする戒めである。このような本来は類似しないはずの二つの事物の間に何らかの不可分の関係が認められ、一方の事物が他方の象徴として言い換えられる修辞格が借代である。先の衣服の例は事物の目印を借りて事物に代えるものであるが、ほかに次のような借代がある。

事物の特性：「寒熱」を借りて「瘧」に代える。
事物の機能：「倉廩」を借りて「脾胃」に代える。
事物の所在：「田野」を借りて「人民」に代える。
事物の工具：「剞劂（彫刻刀）」を借りて「印刷」に代える。
事物の原料：「竹帛」を借りて「書物」に代える。

(二) 句意の理解のために－分承・互備

語法的な規則から見れば例外であるような句法（文章構成）を用いる修辞格も、その知識がないと句意の理解がさまたげられてしまう。

例えば「耳目聡明」のように、本来は「耳聡（耳は聡し）」と「目明（目は明かるし）」という二つの分句であったものを見かけ上の単句にまとめた構文がある。句意を理解するとき下文の「聡・明」を二つに分けて上文の「耳・目」を承けなければならないので分承といわれる。

分承には上文と下文の詞序（語順）が変わらない順承と、「頭項強痛」のように分承するときに「頭痛（頭痛む）」と「項強（項強ばる）」のように下文を倒置して承ける錯承がある。

労則喘息汗出、外内皆越、故気耗矣。
（『素問』挙痛論篇）

下線部の分句は「喘息則内越（喘息する－呼吸が乱れる－ときは則ち内越し－内から気が出て）」「汗出則外越（汗出るときは則ち外越す－外から気が出る）」となる。「労則（労するときは則ち－徒歩旅行などで疲労すると）…故気耗矣（故に気耗ず－気が消耗する）」理由の説明である。

以上の例は分句が上文と下文の二層構造のもので簡単分承といわれるが、これに対

してそれが三層構造となる複雑分承がある。

故本輸者、皆因其気之虚実、疾徐以取之、是謂因衝而写、因衰而補。（『霊枢』邪客）

分句はそれぞれ実下線部の一層、波下線部の二層、二重下線部の三層をうまくよりあわせて理解しなければならない。

因其気之虚、徐以取之、是謂因衰而補

（其の気の虚するに因って、徐やかに以て之を取る、是を衰えるに因って補うと謂う）。

因其気之実、疾以取之、是謂因衝而写

（其の気の実するに因って、疾やかに以て之を取る、是を衝んなるに因って写すと謂う）。

この例では一層から二層へは錯承、二層から三層へは順承している。逆に順承→錯承するもの、また順承→順承するもの、錯承→錯承するものと簡単分承が順承か錯承の二通りであったものが、複雑分承では四通りに増えるわけである。

一つの複句を二つの分句に分けて句意を解釈すべき分承に対して、逆に前文と後文の内容を合わせて解釈すべき「互備（または互文）」という修辞格がある。

寒気入経而稽遅、泣而不行、客于脈外則血少、客于脈中則気不通、故卒然而痛

（寒気経に入りて稽遅し、泣りて行かず、脈外に客るときは則ち血少く、脈中に客るときは則ち気通ぜず、故に卒然として痛む。『素問』挙痛論篇）

この例文の「血少」と「気不通」は合わせて「血気少」、「血気不通」と解釈しなくては句意をそこなってしまう。そのことは引用文のあとの原文に「血気乱」、「血気散」などの字句が見られることからも証明される。

五、東洋医学古典と書物の歴史

以上に述べてきた文字学・語法学・修辞学は現在まで伝えられてきた古典の文字情報に誤りがないときに初めて有用となることはいうまでもない。

近者得編絶、久者簡垢

（近き者は編、絶し、久しき者は簡、垢づく。『霊枢』禁服）

紙が発明され普及した後漢の時代（一～三世紀）まで、書物というのは竹または木製の細長い板（簡という）に一行ずつの文章を書いて並べ、両端をひも（編という）でつづり合わせた「簡冊」というかさばるものであった。第は簡を並べる順序、対策は進言書、内裏雛の手にする笏は手帳に当たる。尺牘は木版に書かれた手紙、檄は軍隊を集める急告の木札。これらの竹・片・木などの部首の漢字は紙以前の名残りである。

帛という絹の布に書かれた書物もあった

が、薄すぎて読書の実用には不便であった。「竹帛」が書物の借代となるのはこの時代の反映である。

「編絶」つまりひもが切れてしまうと簡はばらばらに離れてしまい、これを再びつづり合わせるとき第を誤ってしまうことを錯簡という。

また「簡垢」は長い間に手垢にまみれ、墨の文字が剥奪して読みにくくなってしまうことをいう。

そこへ竹や木より薄く軽量で、帛より丈夫で安価な紙が登場した。

『黄帝内頸明堂』巻一首　序文部分

「洛陽の紙価を高める」

という成語は評判の高い文学作品を書き写すために人々が競って紙を買い求めたことを意味している。

兼旧蔵之巻、合八十一篇二十四巻、勒成一部

（旧蔵の巻を兼せ、合して八十一篇の二十四巻、勒して一部を成す。『素問』王冰序）

簡冊で八十一篇であった『素問』が唐代の王冰という人の手によって二十四巻の紙の巻き物（中に軸があるので巻軸という）に編集された。「勒」は昔、重要な書物が石碑に勒まれ「石経」と呼ばれたことから、写本を作ることを「勒す」といったのである。

巻軸の形態はもともと簡冊を巻いて収納した習慣を踏襲したが、しかし紙は薄く、一巻に簡冊数篇文の内容を収めたので、巻末まで検索するときぐるぐると端から展開するため、手間がかかって不便であった。そこで仏典を招来した西域の書物の装丁などに影響を受けて、紙葉を一枚ずつ折って綴じた冊子本が登場し、さらに紙葉の一枚ずつを木版印刷する技術が発達した。剞劂（彫刻刀）が印刷の借代となるのはこの木版印刷時代のことで、これは十世紀（日本では十六世紀）から近代の活版印刷が伝えられるまで書物の主流であった。

書物の形式の変遷と伝承を研究するのが抄本・版本学（書誌学）であり、書物に書かれた伝承内容を比較研究し、正確な文字情報を復元する作業を校勘、得られた文字情報を総合的に解読する伝統的方法を訓詁という。長い年月に及ぶ書物の変遷の歴史をさかのぼって古典の生命をよみがえらせるためにはこのような研究手続きや知識・技術の習得が欠かせないわけである。

（〒336-0005　埼玉県浦和市東仲町二四－九）